



教育評価の新しい流れ

Towards the New Theories of Educational Assessment

宮岡 久子

Hisako Miyaoka

獨協医科大学看護学部

Dokkyo Medical University School of Nursing

要 旨 看護基礎教育に従事する教員を養成する看護教員養成講習会のカリキュラムが改正され、改正前の「看護教育評価論」に加えて「看護教育評価演習」が新設された。「看護教育評価演習」が新設された背景には、看護基礎教育における看護技術評価の重視と新たな教育評価を看護学教育評価に活用することが意図されている。新たな教育評価とは、従来の行動主義的学習論に基づく評価法に代わって、「真正の評価」と言われるポートフォリオ評価や状況的学習論に基礎を置くパフォーマンス評価である。

本稿では、ポートフォリオ評価とパフォーマンス評価について、概念、特徴、評価方法、看護学教育評価への活用方法について解説した。看護学教育は学際的な学問であり、これまでも学校教育におけるさまざまな教育学の知見を活用しながら発展している。新たな教育評価を看護学教育に活用することができれば、看護学教育の改善に資することができる。

新たな教育評価のうち、ポートフォリオ評価については看護学教育評価において実践例が報告されているが、パフォーマンス評価については、緒についたばかりである。したがって、看護学教育評価として有効か否かの検討は今後の活用結果によるが、パフォーマンス評価の基盤をなしている状況的学習論が看護学教育においても適用できることを指摘した。

キーワード：看護教員養成講習会、看護学教育評価、状況的学習論、ポートフォリオ評価、パフォーマンス評価

1. はじめに

看護基礎教育に従事する教員を養成する看護教員養成講習会のカリキュラムが平成23年度から改正され、実施されている。改正点はいくつかあるが、大学設置基準に準じた単位制の導入と「看護教育評価演習」が新設されたことは特記すべきことである。

平成22年4月1日に厚生労働省から出された「専任教員養成講習会及び教務主任養成講習会ガイドライン」¹⁾ (以下、ガイドライン) によれば、「看護教育評価論」と「看護教育評価演習」

は、実践した教育を評価できるための内容として位置づけられている。改正前のカリキュラムにおいても「看護教育評価論」に該当する科目は置かれていたが、「看護教育評価演習」は、新たに設けられた科目である。このような科目が新設されたということは、何を意味するのだろうか。再びガイドラインによれば、『看護教育評価演習』では、看護教育に重要な看護技術評価に着目する。看護技術の評価規準と評価基準を作成し、その評価方法を実際に体験することにより、看護学生に対する指導と評価の一

体化の理解を深めることをねらいとする。」²⁾と書かれている。つまり、看護教育に重要な看護技術の評価を重視していることが読み取れる。周知のように、厚生労働省から「助産師、看護師教育の技術項目の卒業時の到達度」についてという通達³⁾が出され、看護基礎教育卒業時の看護技術の到達度が示されたことから、看護技術の到達度を評価する必要性があることは理解できる。しかし、これだけでは「看護教育評価演習」を新設した意図が十分に伝わったとは言い難い。そこで、ガイドライン作成に携わった石川⁴⁾の報告を見ると、「また、新たな教育評価を看護学教育評価に活用することも視野に入れての設定でもある。」と述べられている。昨今、教育界において、従来の教育評価の欠点を補うべく新たな教育評価が提唱されているが、それが石川の言う「新たな教育評価」のことであると考えられる。そこで、新たな教育評価とはどのようなものなのか、またそれを看護学教育に活用するとすれば、具体的にはどのように用いたらよいのか、これらのことを明らかにすることは、これからの看護学教育評価の向上に資すると考えられる。

2. 従来の学習理論と教育評価論

教育評価は長い教育の営みの中で行われてきたが、評価が単独で行われてきたわけではない。評価論の中には、その背景に基盤となる学習理論を有しているものがある。例えば、タイラー(R.Tyler)やブルーム(B.S.Bloom)らが提唱した、教育目標を行動目標化し、行動目標を評価するという行動目標的アプローチは、その背景に行動主義的学習論がある。また、到達度評価や形成的評価の理論的ベースには完全習得学習(マスタリーラーニング)がある。行動主義的学習論に基づく評価論は、ブルームら⁵⁾が著した教育目標の分類学(タキソノミー)が敷衍するのに従って、看護教育界においても広く採用されてきた。

それまで教育評価といえば成績付けや単位認定のために行われる、総括的評価という考えが一般的であったが、診断的評価や形成的評価と

いう概念が広く認識され、用いられてきた。しかし、ブルームらによるタキソノミーも2001年にアンダーソン(L.W.Anderson)ら⁶⁾によって改訂され、認知領域が認知科学の知見を反映し変更されている。石井⁷⁾によると、その背景にはアメリカにおける学習心理学の革命的とも言える変化があり、その変化に連動して教育評価論も行動主義から認知主義へと変換し、そのプロセスにおいてパフォーマンス評価、ポートフォリオ、真正の評価などの新しい評価法が開発されたという。

わが国においても、これまでの行動目標的アプローチとは違った視点から教育評価について提言がなされている^{8) 9)}。特に状況的学習論の有効性を提唱する佐伯¹⁰⁾は、「行動主義的、行動目標的な知識観をもっていると、ほんとうに大事なことと些細なことの区別ができなくなってしまう。(後略)」と警告している。ガイドライン作成に関わった石川¹¹⁾の解説にも看護学教育評価上、状況的学習論に基づくパフォーマンス評価が有効であると引例されていることから、佐伯¹²⁾による看護教育への提言が、「看護教育評価演習」を新設することに影響を与えていることが行間から読み取れる。

上述したように、石井¹³⁾は新たな評価法としてパフォーマンス評価、ポートフォリオ、真正の評価をあげているが、真正の評価(authentic assessment)の真正とは、「本物の、本当の」という意味であり、「『真正の評価』を理論的支柱とする評価法がパフォーマンス評価とポートフォリオ評価法である。」¹⁴⁾ということから、本稿ではポートフォリオ評価とパフォーマンス評価について解説する。

3. 新しい評価法

1) ポートフォリオ評価(portfolios assessment)

英語のポートフォリオは、紙ばさみ、折りかばん、書類入れなどと訳される。つまりファイルのようなものを意味する。したがって、ポートフォリオという用語は教育以外においても用いられているが、教育においては、生徒・学生が学習の過程で作成したレポート、資料、ノー

ト、テストなど、あらゆるものをファイルし、そのファイルしたものを評価に用いたのがポートフォリオである。

ポートフォリオは、英国ロンドン大学において総合的学習の評価法として開発され¹⁵⁾、「重要な達成事項を示すファイル」と定義されると言う¹⁶⁾。わが国には鈴木によって紹介され¹⁷⁾ 18)、2002年から小・中・高の学習指導要領に導入された総合学習の評価法として用いられるようになった¹⁹⁾ 20)。看護学教育にも早くから導入され、ポートフォリオによる評価の実践例が紹介されている^{21)~24)}。

(1) ポートフォリオ評価の特徴

ポートフォリオ学習・評価の特徴として小田²⁵⁾は、以下の4点を挙げている。

- ①学習内容として非現実的な学習内容ではなく、実社会性のある内容（オーセンティック）であること。
- ②短期的な学習ではなく、長期的な学習であること。
- ③点数評価（testing）ではなく、内容吟味（アセスメント型）の評価であること。
- ④教室に座って学ぶことだけでなく、実社会から何かを理解すること。

これらの特徴から、ポートフォリオは、座学での講義の評価法ではなく、総合学習のようなプロジェクト型学習に適していると言える。この他に、評価法としてポートフォリオの特徴をあげると、ポートフォリオは、学習活動の中で示した学習成果を集約したものであることから、学習活動におけるプロセスの評価と行うことができる。また、集約した学習成果の中には、何が分かり、何ができるようになったかを示すものが含まれていることから、学習者個々の成長を知ることができ、個人内評価（進歩の評価）とも言える。さらに、学習者に評価の基準・観点を伝えることから、学習者自身がファイルしたものを点検することができ、自己評価が可能となる。

このようにポートフォリオは、テストでは測れない学習のプロセスや成果を評価できる特徴を有している。

(2) ポートフォリオ評価の方法

実際にポートフォリオを評価するためには、ルーブリックを作成しておく必要がある。ルーブリックの作成は、後述するパフォーマンス評価にも必要なものであるが、ルーブリックとは、「成功の度合いを示す数値的な尺度（scale）と、それぞれの尺度にみられる認識や行為の特徴を示した記述語（descriptor）から成る評価基準表」²⁶⁾である。ルーブリックには大別して2種類のものがあり、数字またはABCDを用いる方法と、言語表現を用いる方法がある²⁷⁾。言語表現の例としては、「5－素晴らしい」「4－とてもよい」「3－よい」「2－さらに努力を要する」「1－不十分」などの5段階評価があり、何がどの程度できたら「5－素晴らしい」にするのか、その基準を明文化しておく必要がある。ルーブリックの作成には時間がかかるが、共同で作成し公開することによって議論が可能となり、評価用具としての妥当性と信頼性を高めていくことができる。

(3) 看護学教育評価への活用

前述したように、早くからポートフォリオは看護学教育評価に応用されている。実践例の中には講義主体の科目を評価する時に用いている場合もあるが、ポートフォリオの特徴を生かすためには、授業形態が演習や実習により適していると考えられる。浅田²⁸⁾は看護教育への応用の可能性として、PBL（Problem Based Learning）をあげている。周知のようにPBL²⁹⁾は、授業形態はグループワーク（演習）で行われ、提示された問題場面（または問題状況）に対して、グループメンバーが学習目標をあげ、計画を立て、それに基づいて資料を集め、時には学内外の人的資源など、さまざまな学習資源を活用して問題解決を目指す方法である。そのプロセスにおいて、収集した資料や作成したレポート、プレゼンテーションに用いた資料など、様々なものがファイルされていく。それらをメンバー全員が点検しあったり、チューターと共に評価に活用することが可能である。こうしたポートフォリオ評価により、現在の学習の達成度とさらなる学習目標を明確にすることが可能

となる。

ポートフォリオはまた実習評価にも有効である。オーマン (M.H.Oermann) ら³⁰⁾ は、「教師はポートフォリオを用いることにより、看護学実習が学生にとって意味ある授業であったことを確認できる。」と述べている。受持ち患者を教材として看護の実際を学ぶ実習は、患者の健康上の問題を解決するために、これまで学習した知識と技術を基に、より専門的な知識を調べること、資料を収集すること、レポートを作成すること、患者指導に必要なパンフレットを作成すること、実習記録を作成することなど、さまざまな学習活動を行っていく。その過程で多くの資料がファイルされていくので、それらを実習の途中で、あるいは実習終了後に教員と学生と一緒に評価することができる。その中で「今まで出来なかったことが出来るようになった」、「分からなかったことが分かるようになった」という成功体験は、学生に自信を持たせることになる。また、学生個別の評価により、一人ひとりの成長過程が明確になると同時に、学生個々の学習課題も明確にされるであろう。

2) パフォーマンス評価 (performance assessment)

パフォーマンス評価は、状況的学習論を基盤に新しい評価法として注目されている。

パフォーマンス評価についてギップス (C.V.Gipps)³¹⁾ は「話したり書いたりしてコミュニケーションする技能、問題解決活動など、私たちが生徒に取り組んで欲しいと願っている現実の学習活動をモデルにして評価しようとするものであり、択一式テストのようにこれらを分断して評価することではない。」と述べている。また、松下³²⁾ はパフォーマンス評価とは、「ある特定の文脈のもとで、さまざまな知識や技能などを用いながら行われる、その人自身の振る舞いや作品を直接的に評価する方法」と定義している。

(1) パフォーマンス評価の特徴

ギップス³³⁾ は、「評価の課題の直接性と課題の領域に向けた学習指導の価値の高いこと、そして採点での主観的要素がパフォーマンス評価

の主要な特徴」と述べている。つまり、パフォーマンス評価には学習指導上価値の高い課題が必要であり、その課題は現実の学習活動のなかにあるものから選ばれるということになる。また、評価に際しては採点者の判断に依存するため、主観的要素が入り込むという特徴を有している。

パフォーマンス課題について松下³⁴⁾ は、必ずしも実技的なものである必要はなく、重要なのは「評価したいと思っている能力ができるだけ直接あらわれる課題」<ひとまとまりのプロセスを含んだ課題> <知識や技能などを複合的に用いる課題> であること、と述べている。また、評価に際しては信頼性を確保するために複数の採点者で採点を行っている。

(2) パフォーマンス評価の方法

パフォーマンス評価の方法についてギップス³⁵⁾ は、「パフォーマンス評価では、現実の生活やそれに関連する評価の課題を用いることで、生徒たちの個々の反応を引き出し、適格な評価者が直接観察し評価することになる。」と説明している。さらに反応の評価については、観察や専門家の判断が大きく依存するものであり、これには教師が採点者としてコースワークやエッセイを採点することも含まれている、と言う。つまり、パフォーマンス評価法は、課題に対して生徒・学生が示す行動や記述したものを教師が観察したり、分析して評価するのである。そして、この時に必要なのがポートフォリオ評価と同様にルーブリックなのである。パフォーマンス評価に必要なルーブリックには、一般的か課題特殊的か、全体的か分析的かで4つのタイプに分類されると言う³⁶⁾。どのタイプのルーブリックを作成し用いるかは、課題との関係で決められる。松下³⁷⁾ は、小学6年生に「3 kmを1時間で歩く場合と5 kmを1時間30分で歩く場合との間で速さを比較する」という課題を与え、その課題を評価するために作成したルーブリックを紹介している。それは課題特殊的で分析的なルーブリックで「概念的知識」「手続き的知識」「推論とストラテジー」「コミュニケーション」の4つの評価カテゴリー（観点）から

構成されている。そのルーブリックは採点に入る前に大まかな素案だけを作成し、具体的な中身については採点と同時に書き込んでいくと言う。つまり、予想される解答に基づいて大まかなルーブリックを作成し、具体的な基準については、複数の採点者で採点の過程において明文化するという作業を行っている。このような一連の作業を経験した松下³⁸⁾は、パフォーマンス評価の難点として、課題の開発・実施や採点に多くの時間と労力がかかり、課題数が制限されること、評価の判断が評価者の主観に依存することから客観テストに比べると信頼性が低いこと、ルーブリック作りが難しいことなどを指摘している。しかし、可視化された子ども達の思考や表現から学力を読み解き、それを指導に生かすパフォーマンス評価は、単なる評価法にとどまらず、子どもの学びについての教師の鑑識眼を鍛えてくれる良い機会となる、とパフォーマンス評価を推奨している。

(3) 看護学教育評価への活用

看護学教育評価にパフォーマンス評価を用いるためには、従来の行動目標を評価する方法から思考を切り替える必要はあるが、比較的容易に導入することが可能ではないかと考えられる。パフォーマンス評価を導入するにあたっては理論的基盤となっている状況的学習論を理解しておく必要がある。

看護学教育では専門的な知識や技術を教授しているが、断片的な知識や技術を学生に修得して欲しいと願っているわけではない。実際に看護が行われている場で看護が出来るようになってほしいという願いを持っている。したがって、看護が行われている状況において必要と考える知識や技術を教授しているのである。ゆえに、教授している知識や技術は、看護が行われている場に行えるだけ近づけた方法で行うことが効果的なのである。パフォーマンス評価の基盤となっている状況的学習論は、状況の中で学習が成立する、状況に密着して学習が生じるという学習観なのである。この学習観の是非はともかく、日ごろの授業の中で、看護現場で起こっている看護の実際例（事例など）を話すとき、学

生は強い興味を示す。また、看護技術の演習でベッドメイキングを学習した学生が、実習に出たとたんに演習で学んだ方法ではなく、現場で行われている方法を身につける例を多くの教員が経験している。これらは、学習は状況に密着して成立するという状況的学習論を肯定するものである。

パフォーマンス評価を導入するときには、したがって看護が行われている状況の中から課題が選ばれる必要がある。実際の状況を設定した課題を提示して、その課題に対して解決・遂行されるパフォーマンスをルーブリックを用いて評価するのである。従来から看護技術の評価法としてチェックリストが用いられてきたが、チェックリストはある看護技術を状況から切り取って技術の手技を「できる」「できない」で評価してきた。これは行動目標を評価する方法として有効であったが、状況的学習論の立場に立つならば、その技術が適用される状況を設定し、その状況の中で学生が、どのような思考のもとでどのような行動をとるかを観察し評価する必要がある。

最近、看護学教育の技術演習評価にパフォーマンス評価を応用した実践例が報告されている³⁹⁾。従来の評価においても評価の基準作成が容易ではなかったが、パフォーマンス評価においても評価基準となるルーブリック作成がポイントになる。このように実践例が公表されることによって、評価基準の妥当性や信頼性を検討することが可能となる。

4. おわりに

従来から看護学教育評価で用いられてきた行動主義的学習観に基づく評価法に代わって、認知心理学の成果から導き出された状況的学習観に基づくポートフォリオ評価やパフォーマンス評価について概観した。教育評価の基盤をなす学習理論も学習心理学や教育方法学の発展とともに変化している。

看護学は学際的な学問の一つであり、さまざまな学問の知見を応用しながら発展している。看護学教育評価についても、これまで学校教育

で実践されている教育学の知見を取り入れてきた。そうして教育評価は看護学教育においても重要な機能を果たし、評価をすることにより課題が明らかになり、改善に役立てられた。

今回紹介した新しい評価方法が必ずしも万能とは言えない。それはどのような方法であっても必ず長所と短所を合わせ持っているからである。しかし、長所や短所は実際使ってみなければ分からないものである。ポートフォリオ評価については、実践例が少しずつ増えてきており、看護学教育評価における有効性が確かめられつつある。しかし、パフォーマンス評価については看護学教育評価として緒に就いたばかりである。今後、看護教員養成講習会を受講した教員が中心となり、積極的に看護技術の評価に応用し、その有効性について検証されることを期待する。

引用文献

- 1) 厚生労働省：専任教員養成講習会及び教務主任養成講習会ガイドライン，2010/4/1.
[cited 2010 May10]Available from:<http://www.zenhokan.or.jp/new/new/new169html>
- 2) 前掲1)，7.
- 3) 厚生労働省医政局看護課長：「助産師，看護師教育の技術項目の到達度」について，医政看発第0208001号，2008/2/8.
- 4) 石川倫子：「専任教員養成講習会及び教務主任養成講習会ガイドライン」解説 教育課程に焦点をあてて，看護教育，52(2)，100-107，2011.
- 5) Benjamin,S.Bloom.,J,Thomas Hastings et al./梶田叡一，渋谷憲一，他訳：教育評価法ハンドブック，第一法規，東京，1971.
- 6) 有本昌弘：アンダーソンとクラスウォールの新しいタキソノミー，人間教育研究協議会編「教育フォーラム29・目標に準拠した評価の考え方と実際」，金子書房，東京，2002.
- 7) 石井英真：「改訂版タキソノミー」における教育目標・評価論に関する一考察：パフォーマンス評価の位置づけを中心に，京都大学大学院教育学研究科紀要，50，172-185，2004.
- 8) 鹿毛雅治：教育評価の新しい視点，看護教育，40(6)，474-477，1996.
- 9) 佐伯 胖：インタビュー 看護教育への警鐘 いまこそ行動主義的な教育体制からの脱皮を，看護教育，49(5)，388-394，2008.
- 10) 前掲9)，393.
- 11) 前掲4)，105.
- 12) 前掲9)。
- 13) 前掲7)，172.
- 14) 平田知美：教育評価の動向と課題に対する一考察，広島大学大学院教育学研究科紀要，第3部 第57号，83-90，2008.
- 15) 大関信子：英国の卒後教育での実際，Quality Nursing，6(3)，60-68，2000.
- 16) 小田勝己：総合的な学習に適したポートフォリオ学習と評価，3，学事出版，東京，2001.
- 17) 前掲16)，10.
- 18) Esm'e Glauert/鈴木秀幸：教師と子供のポートフォリオ評価，論創社，東京，1999.
- 19) 大隅紀和：総合学習のポートフォリオと評価 その考え方と実際，黎明書房，名古屋，2002.
- 20) 川崎ひろか：小学校におけるポートフォリオの広がり，看護教育，48(1)，24-30，2007.
- 21) 唐澤由美子,正木治恵，他：達成事項を記録したポートフォリオ評価，Quality Nursing，9(6)，52-59，2003.
- 22) 吾郷美奈恵,山下一也，他：看護基礎教育でのポートフォリオ活用，看護展望，30(11)，33-38，2005.
- 23) 安川仁子：看護教育におけるポートフォリオの活用—学習のプロセスを重視した評価，看護教育，48(1)，18-23，2007.
- 24) 鈴木敏恵：ポートフォリオが看護教育を変える 与えられた学びから意志のある学び

- へ, 看護教育, 48(1), 10-17, 2007.
- 25) 前掲16), 122-123.
- 26) 田中耕二編著: 教育評価の未来を拓く, 205, ミネルヴァ書房, 京都, 2003.
- 27) 前掲16), 130.
- 28) 浅田 豊: 「新しい学力観」に立つ日本の学校教育におけるポートフォリオ学習の可能性と意義, Quality Nursing, 6 (3), 54-56, 2000.
- 29) Carolyn,M.Byrne./小山真理子訳: 看護教育方法の改革 Problem-Based Learningの導入, 看護教育, 37 (3), 193-198, 1996.
- 30) Marilyn,H.Oermann.,Kathleen,B.Gaberson./舟島なをみ監訳: 看護学教育における講義・演習・実習の評価, 221, 医学書院, 東京, 1998.
- 31) Caroline,V.Gipps./鈴木秀幸: 第6章パフォーマンス評価, 新しい評価を求めてーテスト教育の終焉ー, 135, 論創社, 東京, 1994.
- 32) 松下佳代: 第12章 パフォーマンス評価による学びの可視化, 秋田喜代美他監修 事例から学ぶはじめての質的研究法, 教育・学習編, 279, 東京図書, 東京, 2007.
- 33) 前掲31), 141.
- 34) 前掲32), 282.
- 35) 前掲31), 137.
- 36) 前掲32), 285.
- 37) 前掲32), 282-286.
- 38) 松下佳代: パフォーマンス評価ー子どもの思考と表現を評価するー, 日本標準ブックレットNO.7, 48-52, 日本標準, 東京, 2009.
- 39) 新地裕子,久志篤子, 他: 状況性を学ぶ技術演習「個に応じた口腔ケア」の教育評価, 看護教育, 238-242, 51 (3), 2010.